

職業”振り込め詐欺”を読んで

21173097 松本まどか

この本は、平成 21 年 2 月 9 日に放送され、大反響を呼んだ NHK スペシャル「職業”詐欺”～増殖する若者犯罪グループ～」を書籍化したものです。番組は反響を呼び再放送は 3 回に及びました。平成 16 年頃から徐々に被害が目立ち始めた振り込め詐欺は、5 年間で被害総額 1300 億円を超えました。謎が多く、警察も把握できていない振り込め詐欺の実態を多くの人に知らせて犯罪や被害を予防・抑止することを目的に、取材班は 120 日間にわたる取材を開始しました。

本書は全 8 章で構成され、取材班が直接詐欺師たちに疑問をぶつけ、返ってきた生の言葉や取材中の緊迫した状況が詳細に記されています。

第 1 章では振り込め詐欺ビジネスの仕組みについて紹介されます。加害者と被害者が一度も顔を合やすことのない非接触型の犯罪と言われる振り込め詐欺は加害者を捕まえることがとても困難だそうです。詐欺師達は仕事感覚で詐欺に手を染めていました。1 日に騙し取る金額のノルマがあったり、捕まらずに多くの金を騙し取るためのマニュアルがあったり、普通の企業と同じような仕組みで詐欺が行われている現実を知ることができる章です。

第 2 章 3 章では詐欺師や元詐欺師達の人生を振り返りながら、こういった人達が詐欺に手を染めてしまうのか、どんな気持ちで人々から金を騙し取るのかについて書かれています。真っ当な人生を送っていた末に挫折してしまい詐欺に足を踏み入れた人、明日食べるお金もなく目の前の金欲しさに詐欺を選んだ人、大企業に就職しお金には困らない生活を送っていたにもかかわらず詐欺に魅力を感じてしまった人など、詐欺師達には多様な人生があり、詐欺を始める動機もそれぞれ全く違っていました。表の社会で生きていくと知ることのできない彼らの話は読み応えがありました。

また第 5 章では詐欺被害者のその後の暮らしについて紹介されます。これまでの章で、詐欺師達が他人から騙し取った金で豪遊している現実を知った後にこの章を読むと、詐欺がいかに残酷な犯罪であるかを再確認できると思います。私がこの章で印象的だった言葉があります。詐欺被害を受け、医療費を払えなくなった方の「詐欺の犯罪者達は殺人者だと思う」という言葉です。前の章で「人を殺すわけではない」と詐欺を始めた詐欺師がいましたが、その言葉を知った上で目にする被害者の悲痛の叫びは、とても重い意味を持っていると感じました。

7 章では、不況が加速させる価値観の崩壊について触れられます。振り込め詐欺が増えるというポイントについて一番よく理解できる章です。

そして 8 章では社会に溶け込む元詐欺犯たちが何をしているのかが書かれています。

元詐欺師達は、詐欺で騙し取ったお金を利用し、新しいビジネスを展開していました。取材を受けた元詐欺師の起業家が「詐欺で得た金で起業ができたけれど、その金はもう使って溶けたため、今持っている金は正業で得た金だと思っている」と話していたことが印象的でした。詐欺という卑劣な行為で得たお金で新しい人生のスタートを切っている元詐欺師達が日本社会に溶け込んでいるのです。

私が本書を読んだ中で、特に印象的だったことが2つあります。

1つ目は、詐欺師たちが詐欺を「仕事」、実行犯を「従業員」、アジトを「店舗」と呼ぶなど、タイトルにもある通り詐欺を「職業」として考えていたことです。取材されたある詐欺グループの男性の話によると、仲間内で共有するマニュアルがあったり、だましの電話は1日200件というノルマがあったりするなど、普通に仕事をしている感覚で振り込め詐欺を行なっているそうです。個人的に、振り込め詐欺は、楽して金を儲けたいという怠惰な人間が、騙しやすいお年寄りをターゲットに電話をたくさんかけて金を騙し取るというイメージでした。そのため、詐欺師たちが私の想像よりも真剣に稼げる手口を考えて、組織で細かく決められたルールに乗っ取り、時には熱意を持って仕事のように詐欺をしているところがとても意外でした。

2つ目は、普通の人間と犯罪者の境界の曖昧さです。詐欺グループの上層部で組織を操る人達が有名大学や一流企業出身のエリートであること、また、使い捨ての手駒として警察に捕まる危険性の高い役割を任される人達は、不況により職を失った人や、内定取り消しを受けた学生など他人事とは思えないほど身近な人が多いことに衝撃を受けました。それまで真っ当に生きていた人間でも、挫折して先が見えなくなった時にネット掲示板や知り合いからの誘いで簡単に参加して大金を手にできてしまう振り込め詐欺の敷居の低さ、誘惑の強さに恐ろしさを感じました。

そして、本書のポイントとなるのは、若者達がなぜ詐欺の道に進むのか、どういう社会が詐欺を加速させてしまうのか、というところです。

私が印象的だったことの1つ目に挙げたように、熱意を持って仕事のように詐欺を行なっている若者達がいる現実を知ったとき、本書を読んでいる最中は、詐欺にかかる労力や時間を真っ当な仕事のために使えないのかと思いました。しかし、彼らは不況による経済的格差で富裕層と貧困層とで二極化する日本において、真っ当な仕事をしていても上の存在にはなれないと言い切ります。詐欺グループを仕切り、詐欺犯達から顧問と呼ばれる男は取材に対し、「日本には、もうカネ持ちか、コジキしかおらんのですよ。」と答えていました。不景気になればなるほど、経済的格差は加速し、さらに金こそ全てという行き過ぎた拝金主義により価値観が崩壊し詐欺に手を染める人が増えていくのです。

本書で取り上げられた詐欺師の中に、犯罪とは無縁の人生を送り、就職氷河期の中大企業の就職を勝ち取り、会社のために身を粉にして働いたにも関わらず突然のリストラを宣

告された男性がいました。彼は、尽くした会社に切り捨てられ、転職先でもリストラされた落ちこぼれとして扱われ、頑張っても報われない社会の理不尽さを嫌と言うほど感じ、まともに働くことは馬鹿馬鹿しいと感じたそうです。彼は、会社という自分より”上”の存在に、食われる形で思い描いた人生を狂わされたと見ることができます。”上が下を食う構図”という言葉は本書で何度も出てくるキーワードです。頑張っても報われないという社会からの裏切りに復讐心を持って詐欺の世界に足を踏み入れても、そこでも詐欺グループの上部に大金が渡り、下っ端になる人たちは少ない取り分で捕まるリスクの高い仕事をさせられます。これも、詐欺が減らない理由です。”上”となる詐欺グループのトップは捕まることなく大金を得て、”下”となる詐欺グループの下っ端達は上に食われる形で使い捨てにされるのです。

この本を読んで、今まで抱いていた詐欺師へのイメージががらりと変わりました。漠然と不良や暴力団のような裏社会で生きている人、自分とは関係のない世界で生きている人、または根っからの悪人が詐欺の加害者なのではないかと思っていました。しかし現実には必ずしもそうではないことを知ることができました。一本の電話で大金を騙し取れることを知って感覚が麻痺していく若者たちや、表の社会で挫折して裏の社会でも使い捨てにされている人たちの様子にやるせなさを感じると同時に、もし自分が人生に挫折した時、この本に取り上げられている若者たちと同じように道を踏み外さないかという不安を感じました。

また、エリート詐欺師たちの大金を儲けることに対する熱量、真剣さを知り、自分や知り合いが詐欺被害者になるかもしれないという危機感を抱くことができました。

そして、現在のコロナ禍で不況が加速する中、また振り込め詐欺のような犯罪が増えてしまうのではないかと感じました。

私はこの本を、詐欺という犯罪に自分は無関係だと思っている人にぜひ読んで欲しいと思います。自分が思っているよりも詐欺は私たちの日常に溶け込んでいて、身近なものであることに気付かされます。本書は2009年に発行された本ですが、振り込め詐欺は今でも形を変えて私たちの生活の中に溶け込んでいます。詐欺の手法こそ変わってもその根本の問題は変わっていないと思うので、読んで損はない一冊です。

参考文献 職業”振り込め詐欺” NHK スペシャル「職業”詐欺”」取材班